



失ったものを数えるな

校長 赤松 弘一



9月6日から体育大会の練習が始まりました。陽射しは強くまだまだ暑いですが、吹く風には秋のさわやかさが感じられます。全校生徒が一堂に会するのは、1学期の始業式以降、初めてでした。グラウンドに集まった530人近い全校生徒を見ながら、なんとしても思い出に残る体育大会を成功させたいと感じました。



2回きりの全校練習 集中できました

兵庫県では新型コロナの緊急事態宣言が9月末まで延長されました。明石市は「感染者数も多く、引き続き警戒が必要です。体育大会は午前中開催としてプログラムの縮小や無観客での実施などになり残念なことです。しかし学校や家庭での感染が広がっている現状では、学校を休

校にせず、学びを継続するために、対策を最優先にする必要があるために致し方ありません。そして安全安心な学校であるために、子ども自身やご家族が体調不良の時は登校しないという点について、ご協力いただきますようお願いいたします。

学校教育は教科の学習だけで完結するものではありません。子どもは様々な行事で得た達成感や、他者と協力したり共感したりする経験などを通して成長していきます。部活動、委員会活動、掃除や給食、儀式などは社会生活に必要な様々な規範意識や協調性を身につける上で欠かせない活動です。感染状況を見ながら、一律に中止することなく子どもたちと共に工夫しながら取り組んでまいります。

さて、東京パラリンピックでは、運動機能に様々な障がいのある選手が全力で競技する姿がテレビで放送されました。勝敗が決まった後、勝者と敗者が互いの健闘をたたえ合う姿に、私は震えるような感動をもらいました。パラリンピックを通して私が最も心に残ったのは、人間のもつ可能性の計り知れない大きさと強さ、そして他者を思いやる心の広さです。私がこの選手たちのように障がいがあったならば、障がいを恨み、心を閉ざして挑戦しようとしのではないかと思います。しかし、パラアスリートたちはしっかり前を向いて、自分の可能性を開拓していきます。

「失ったものを数えるな、残されたものを最大限生かせ」これは“パラリンピックの父”と呼ばれるイギリスの病院の医師、ルードウィヒ・グットマン博士（1899～1980）が残した言葉です。失ったものや、変えようのない過去にとらわれて自分の可能性までを捨ててしまうのではなく、命ある限り未来に向けて挑戦していく。パラリンピックの精神を見事に表す言葉です。

この度のコロナ禍のために、できなくなったこともありますが、それを嘆いていても解決しません。誰かを責めても恨んでも気持ちがささくれるばかりです。今できることを可能な新しい形でやり切ることが大切です。そのために知恵を集め、工夫し、思いやりの気持ちをもって仲間と協力していきましょう。そんなみんなの協力で体育大会がやり遂げられれば、全員が勝者となる最高の大会になるでしょう。